

町の芸術家

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどとは思わない

子供の魂をそのまま

抱えているから

今日も大根の葉っぱに止まる

バツタを追って大騒ぎになる

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどとは思ってもしない

お婆さんお先にどうぞ

とバスに乗る順番を譲られても

自分に好意が向けられている

などとは受け取らない

お婆さんと呼ばれたことに立腹し

お爺さんからお先にどうぞと

四十年配の紳士を睨み

やり返してしまふ

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどと思わない

しかしシルバー割引のテーブルには

先陣きつてちやつかり席を占める

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどとは思わない

店員をつかまえると

自分の体力の続く限り離れず

説明を求める

この色合いとこの色合いの

どちらが映えるかしら

このスタイルとこのスタイルの

どちらが似合うかしら

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどはわきまえない

子供の魂をそのままに

抱えているから

大根の葉っぱに止まるバツタを追

籠に放つては一日中

縁側で何枚も何枚も

スケッチに余念がない

町の芸術家は歳をとらない

歳をとったなどということばがない

バツタに飽きると

自転車にまたがり信号も待たずに

交差点に突入する

子供の魂をそのままに

抱えているから

音をきしませ急ブレーキで止まる車に

ひらひら手を振る

元旦に

実によい日和だ

木々の枝に積もった雪を

爽やかな条光が照らす

それは氷砂糖だ

それはシャーベットだ

一面の銀世界だ

仮設テントでは

突然仕事を失った人たちが

伸び放題の髭面のままで

ポリ容器に配られた

雑煮を無心に食っている

一月前までは車のドアを

毎日毎日精密機械よろしく

取り付けてきた腕が

ドアも金具も車も工場も

いっぺんに取り外されたのだ

そんな無体な

そんな滅茶苦茶な

そんな無慈悲な

などと考えるのも根が尽き

実によい日和なのに

実に美しい銀世界なのに

なにを怒鳴っても

なにに地団駄踏んでも

今は雑煮を食うことしか

他にすることはない

朝

清々しい気が満ち

清々しい光が屋根屋根を照らす

道が真っ直ぐに伸びており

空気がすっと流れていく

朝刊がポストに入り

刈り込んだばかりの槇の葉から

甘い香りが漂う

ランドセルが二つ三つ

角を曲がるまで手を振る

川の浅瀬では鯉や鴨や鷺たちが

ゆつくりと餌を探している

電車が入り出ていく

人が駅に吸い込まれ

駅から降り立ち

遮断機の前で急ぎ加減で待つ

交差点が膨らみ

水銀灯の光が知らぬ間に消えている

豪雨襲来

叩き付ける雨
ぶちまける雨

雨の大軍がうなりをあげて
攻めてくる

堰を切り
ダムが決壊したかのごとくに
雨が雪崩れ落ちる

小さい者たちの上に
気弱な者たちの上に
横柄な者たちの上に
勝ち誇った者たちの上に

タタタタタタタタタタ

ダダダダダダダダダダ

ヒユルヒユルヒユルヒユル
シユルシユルシユルシユル

ゴウゴウゴウゴウゴウゴウ
ドウドウドウドウドウドウ
ドンドンドンドンドンドン

豪雨襲来

豪雨の大軍襲来

小さい者たちの上に
気弱な者たちの上に
横柄な者たちの上に
勝ち誇った者たちの上に

なんなのか

雄叫びをあげ
攻めてくる

見よ 見よ
鉤裂きに走る稲光を
台風の唸りにも似た
虎落を貫きくる
幾千万の鬨の声を

占い

咲く、咲かない、咲く、咲かない
叶う、叶わない、叶う、叶わない

今日の運勢は

ワガママや自信過剰は禁物の時
事を始める前には再度点検すること
となっていた

それを一日の終わりに知る

当たっているといえは
当たっているようだし

見間違いだといえは

全くの見間違いかもしれない

北東はだめだとか

黄色のシャツはダメだとか
衝動買いに気を付けなさいとか
先祖への敬いが足りないだとか

いわれてみれば

たいてい思い当たる節があり

だったんだよなあ

だったんだもんなあ

というふうにはこんでしまう

北西の方にいけばよかった

シャツは赤色に決まってるでしょ

いらぬ週刊誌など買ってきて

墓参りなんか二年もいってないのね

一日の終わりにそんなこと

いわれても

ボコボコに塞ぎ込んで

しまうのが落ちで

叶う、叶わない、叶う、叶わない
咲く、咲かない、咲く、咲かない

なんてよせばいいのに

せっかく机の奥深くに

しまい込んだグッズなど取り出し

右にいつでも左にいつでも

上のぼっても下にくだつても

埒のあかない占いゲームに

神経のありつたけを注ぎ

寝る間を忘れはまり込んで

定年

今一つしっくりこない

猛烈に働かされてきたこれまでが
なんだったのだろうか

ところが、定年

年金の支給開始を四年、五年先に
伸ばしてしまつて

どうしろというのだ

かろうじて再雇用などという制度を
つくりはしたが

現場では露骨にもう用はない

何でこんなところにうろうろしてるの

という態度で迎えられる

あるいは、老害かと

まあ、再雇用先があるというのは
よい方かもしれないが

定年前までのカタキとばかりに
冷ややかな仕打ちを受けることがある

そんなふうにするのは

あるいは見当違いなのかもしれないが

責任がありそうで、なさそうな

中途半端な仕事か

どうにもしっくりこない

なんなのか

必要なのか、 unnecessaryなのか
などと職場で一人ごちてみようと

お前の人徳のなさのせいだと
ニタニタと笑われるばかりだ

怒り

つまらぬことで怒ってみたり
悩んでみたり

およそ埒もないことなのに
三日も経てばもうバカバカし過ぎて

あんなに本気で
何に捻れていたのかと
とんと己にアイツが尽きる

少しは大人になっても悪くはない
ということだろうが
どっこいそうは問屋が卸さない

結局また

つまらぬことで怒ってみたり

悩んでみたり

およそ埒もないことで
沈み込んでみたりが
またそこから生まれ始める

低気圧停滞

一月以上もの間
低気圧が停滞している

毎日が雨、雨、雨
地面を叩き付ける雨
窓ガラスを叩き付ける雨
街中を不気味に黙らせ
土色に点滅させる

道路にも
膝頭ほどまでの水を溜め
地下の街にも流れ込み
電車やバスの運行を阻む
崖を崩し
瓦礫を押し流し

川を狂い走らせ

生まれ出たばかりの蝉たちは
あまりの異様な光景に
鳴くこともできず
交尾さえままならず
光というものを知らぬまま
落ち
濡れ逝く

プラス思考

夜中に転んで

したたかに腰を打ち付けた

しかし、捻ったわけでも

挫いたわけでもない

雨に降り込められ

鬱陶しさを通り越し

息苦しさに鰓で呼吸をしている

しかし、暗算もできるし

空想を秋空に飛ばすことも

できる

何を好んでか

机にかじりついて

埒もない小説や詩などを

書いている

いや、始終書かねばならない

という観念に囚われている

今日は何をしようかとか

何もすることがないなどとは

なりようもない

野球が始まると

プレイボールからゲームセット

までを見ないと納まらない

頼まれたわけでもないのに

三時間、四時間釘付けになる

しかし、見ないことでの苦しみ

の方が耐え難く

見ないことの三時間、四時間は

不毛の時間となる

元来プライドばかりが高く
気が短い

高望みをするばかりに

学歴も、仕事も、趣味も

全て中途半端だ

十八歳のとき医者に

匙を投げられたのだったが

どっこい食っていけるだけの

仕事には恵まれ

波の大小をくぐり抜け

定年を過ぎてもしたたかに

棲息している

南風

湿りを帯びた生暖かい風が吹く

肌に吹き出した汗を乾かすこともなく

顔にも首筋にも脇の下にも

さらに夥しい汗を吹き出させ

女たちの身に付けた薄い衣を

やたらとめくれ上がらせたりするが

男たちのか細い神経は麻痺したままで

一物を勃起させるには生暖か過ぎて

今夜も消化不良の時を刻んでゆく

ひどく湿りを帯びた生暖かい風吹けば

体も心も冷やせとの指令のとおり

なにやかやと苛立ち多く

なにやかやと不平不満が募るばかり

湿りを帯びた生暖かい風が吹く

肌に吹き出した汗を吹き飛ばすこともなく

心に浮かんだ不快を消すこともなく

冷や冷やとした思いばかりが流れゆく

青い鳥

長く続いた川の増水がやや治まり

涼し気な水音が戻ってきた

薙ぎ倒された川原の草は

褐色に色褪せていたりはずるが

決して死滅してはいない

隙あらば芽を育まんと

水音のリズムにしつかり耳を傾けている

水に折れ臥し

土砂に埋もれた草の背を跨いで

背中の青い鳥が突然姿を現した

鳥はよく動く羽をきしきしと動かし

草の上から傍の枝にひよいと移り

少しだけ首を傾げ

次の瞬間にはまた元の草の上に戻る

鮮やかな青い背が

少し黄ばんだままの川水にきらりと

きらきらと光る

まるで光輝く青い絵の具を

塗ったのかと思えるほどに

青い鳥の背は一層きびきびと動き

川原の褐色の草色との対照が

極めて明確で小気味よい

土砂に埋もれた草の精でもあるのだろうか

背中の青い鳥は突如姿を現し

流れのままに水に折れ臥した草の上を

小刻みに歩き

傍の枝にすいと移っては首を傾げ

すぐにまた元の草の上に戻ってくる

柿の木

勝手に芽を出した洪柿の木は強い
二度も三度も根本から伐り取り
挙げ匂に放置していたのだが
その隙にするすると伸び出し
今では一番高い樹高を誇っている

周囲には丹精をこめた
マキ、カシ、ウメ、モチなどが
並んでいるが

柿の葉色が一番瑞々しく青い
最初から伐り取ったりしなけれ
ばどこまでどう伸びていたのや
らと思う反面
大切に構っていたとしたら
むしろ生きる気色少なく

雑草に隠れるほどにひよろりと
弱々しい木の類이었다ったのかもしれない

その証拠に

名物という甘柿の苗を取り寄せ
毎年施肥を怠らず、雑木は伐り取り
楽しみに成長を待っているのだが

桃栗三年、柿八年の八年を
とうに越したというのに
樹高も伸びず、一向に実をつける
気配すらない

後ろから追いかけてきた洪柿が
二度も三度も瀕死の重傷を負い
根性で伸びてきたというのに

なんなのか

もう青い実をつけようとする

これは偶然ではないのかもしれない
本来に選ばれたものは

幾多の苦勞や反骨の中から
土をもたげ

空をもたげて
満を持し

姿を現すものであるかもしれない

法悦

試用期間で首になったと

身も世もあらぬげに嘆いているが

どっこい、喜ぶがよい

ようやくお前の上にも大いなるものが

手を差し伸べておられる

お前が必要とすることを察し

躓きの石ころを転がされたのだ

そうでもないかと

お前は傲岸無比のままです、足るを知らず

足元を見ず

また、上には上があるということにも

気付きようもなかった

お前の前をふっと横切る影

風が吹き渡り

嵐が吹き募つても

お前が必要とすることを察し

大いなるものがいつも動いている

お前自身が約束して誕生してきたことの中身を

大いなるものはちゃんと知っている

大いなるものとお前は

強く太い縁で結ばれている

試用期間で首になったと

身も世もあらぬげに嘆いているが

いよいよ、この時来たると喜ぶがよい

格差

あるところにはあるのだ、お金が

研究室でいうならば

ここと行ったところにはうなるほど

お金が集まり

使いきれぬことに頭を悩ましている

隣の研究室では

コピーも節約し、鉛筆一本を大事に使う

人が群れてくるのは

当然のごとく前者の方で

後者の方には

よほどのことでもないときりつかない

同じことは、国内外のいたるところに

あるのではないか

食料の捨て場に困り

リサイクルの真似事などをしている

かと思えば

争いと、疫病と、飢えとで

塗炭の苦しみを舐めている

前者を勝ち組とってよいのかどうか

疑わしいが

後者の方になるとさすがに

心が乱れてくるのは否めない

前者にも、後者にも

前者には殊に

狡猾な火事場泥棒が徘徊し

人を人とも思わない輩のさばることに

ならないことだけを願うのみだ

労働考

時間勤務になつて

こゝも受け身でいていいものかと思つ
いや、こゝも受け身でなくてはならぬもの
かと思つ

時間勤務になる前は

十時になろうと、十一時になろうと
積極的に、自ら考え動くのが当たり前で
休日であるうと、夜中であろうと
家にまで仕事が進いかけてきた

今、有効求人倍率は四割と少しだ

働き盛りでなければならぬ若者に
時間勤務や、派遣勤務でさえ十分に
与えられないという

一方、数少ない正規職員は

時間無制限で働くのが当たり前で
十時、十一時はおろか
朝方まで仕事のがしかかってくるという

今、有効求人倍率は四割と少しだ

おかしいことがおかしいと
誰も言えなくなつてしまつては
泣けばいいのか、バカバカしさに笑うしか
ないのか

泣くしかないのか、バカバカしいと笑うしか
手はないのか

飛行機雲

西の空に飛行機雲が一筋

直線の形はなく

かなり周囲の雲や空と

重なり合って

あわあわとしている

それでも飛行機雲

最初は青空を突っ切り

凜と伸びていたのかもしれない

青空の一面に

なにかの明確な意志を

くつきりと

描いていたのかもしれない

いふなれば初老の飛行機雲

足取りは不確かだ

背中もいささか丸く

頭に至っては白いものが

ザワザワ揺れる

それでも飛行機雲

周囲の綿雲に呑み込まれる

ことを潔しとせず

折りからの風に吹き払われる

ことを頑固に拒んでいる

西の空に飛行機雲

山の端のあたりまで

よろけ辿り着いた恰好なのに

その目は変わらず

天空の頂を睨んでいる

木漏れ日

若葉で蒸し返りそうな林を歩く
上着を脱いで額の汗を拭う

スギやヒノキやクスの大木に混じって
モミジやケヤキやツバキの若木にも
新芽がびっしり伸びている

人里からほんの一跨ぎしただけの
距離にしかすぎないのに
林特有の涼やかな気に満ち
林でしかない匂いを十分に発している

微かに風が抜けていく
木漏れ日が緑色の光となって
ゆるやかにこぼれている

林は心地よいから
思い切り伸びをする
そうすると尻のあたりが甘痒く
緊張する

抱えてきた鬱々とした気分も
林の気に身を委ねていると
なにやら懐かしい
はるかな思いに変わっていく

木漏れ日の特にゆるやかに
こぼれるあたりに
ふいに湧き出てきたのではないかと
思われる小さな水流

苔むした小石の間を

なんなのか

日の光を透いて静かに流れる

スギやヒノキやクスの大木が

高く広く枝を張り

その枝々をくぐってきた木漏れ日が

モミジやケヤキやツバキの若木の

黄緑の葉をやさしく揺らし

鮮やかに照らし出している